

Title	ネオ・ヨアキム主義における東西交点としての「第三の国」： メラール・ファン・デン・ブルック、日本の雑誌『第三帝国』、パウル・フリードリヒ
Sub Title	Das dritte Reich als Knotenpunkt im Neo-Joachimismus bei Moeller van den Bruck, der japanischen Zeitschrift The third empire und Paul Friedrich
Author	小黒, 康正(Oguro, Yasumasa)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2023
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.125, (2023. 12) ,p.26 (159)- 43 (142)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	香田芳樹教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01250001-0026">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01250001-0026</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ネオ・ヨアキム主義における東西交点としての「第三の国」

——メラール・ファン・デン・ブルック、日本の雑誌『第三帝国』、パウル・フリードリヒ——

小黒 康正

一 一九二三年

二〇二三年の夏学期にベルリン自由大学で連続講義「危機の年一九二三年におけるベルリン 文学と学問と芸術におけるパラレルワールド」が企画された。一九二三年は、ドイツの賠償金不払いを理由にフランスとベルギーの軍隊がドイツのルール地方を占拠し、その後ドイツ国内でハイパーインフレが進行する中で十一月にヒトラーがミュンヘン一揆を起こし、ドイツ全体が危機に陥った年だったのである。ヒトラーは、前年にイタリアでクーデターによって政権を奪取したムッソリーニをまねて反乱を起こしたものの、すぐに鎮圧され投獄されたが、この一件で却って「保守系右派の政治的英雄」として知名度を高め、翌年に出所して、国民社会主義ドイツ労働者党を再建したのである。デイトトリヒ・エカルトを中心にドイツ労働者党が立ち上げられたのは一九一九年であり、党名がドイツ労働者党から国民社会主義ドイツ労働者党へ改称され、ミュンヘンの「ホーフブローハウス」でヒトラーによって二十五か条の党綱領が出されたのは一九二〇年であったが、ミュンヘン一揆がヴァイマル共和国内で帝政支持者を勢いづかせ、首都ベルリンにおいて右派と左派の対立を激化させた年、つまり一九



を引くからだ。この写真は、連続講義の企画担当者であるクリステイーネ・フランク教授によれば、関東大震災直後の写真であった。一九二三年九月一日に関東地方を襲った巨大地震が未曾有の自然災害であったばかりではなく、日本社会を根底から覆す大惨事でもあったことはよく知られている。日本では、第一次世界大戦前後に普通選挙運動が展開され民本主義や自由主義が高揚し、一九一八年に米騒動、一九二一年に原敬首相暗殺事件、一九二二年にシベリア出兵からの撤退が起きた後に大震災が発生し、災害対応の主役となった陸軍の影響力が高まる中で、一九二五年の治安維持法成立と一九三一年の満州事変を経て、一九三三年二月に日本は国際連盟を脱退して国際的に孤立して行くのであった。ドイツが同年十月に国際連盟を脱退することを併せて考えると、連続講義のポスターはドイツのみならず、日本における一九二三年の「危機」とその後の紆余曲折を歪んだ線路で示唆していたと言えよう。

ドイツの場合、一九二三年から一九三三年までは、ヒトラーによるミュンヘン一揆からベルリンでの政権獲得までの十年として、ナチス・ドイツの自称であり、通称であり、俗称である「第三帝国」という言説が流布した十年でもあった。<sup>五</sup>この言葉の使用禁止が一九三九年六月十三日付の「総統命令」で出されたこともあるが、ヒトラー自身、一九四一年十二月十七日から十八日にかけての談話で「今や、ドイツという時、それは『第三帝国』以外の何ものでもない」と語っていたのだ。この言説が流布する契機として知られているメラール・ファン・デン・ブルックの著作『第三の国』<sup>六</sup>が刊行された年がまさに一九二三年であり、同書によって政治的イデオロギーとされた「ライヒ」<sup>七</sup> Reich という言葉がドイツ民族を統一する理念としてドイツ語圏で広まったのである。同書以降の一般的な理解によれば、「ライヒ」を巡る三段階としてあるのは、第一に神聖ローマ帝国、第二にドイツ帝国であり、第三に一九一九年成立のヴァイマル共和国を認めない保守勢力が求めた新たな政治体制であり、詰まるところ、ナチス・ドイツの「第三帝国」<sup>八</sup> das Dritte Reich であった。ナチスとは異なる意味合いで「第三の国」<sup>九</sup> das dritte Reich という言葉を用いたエルンスト・ブロッホは、ナチスの「土地台帳」となり、ナチズムの「主著」となったメラールの著作が「運動のエリート」たちの心を捉えたと言う。<sup>九</sup> この「主著」が刊行された年も、ヒトラーが彼自身に決定的な政治的影響を与えたデイトトリヒ・エカルトと共にミュンヘン一揆を起こした年も、ヒトラーに「第

三帝国」という言葉をもたらしたエカルトがモルヒネ中毒による心臓発作で死亡した年も、すべて同年であった。その意味で、「危機の年」一九二三年は「第三の国」の年であったとも言えよう。

メラーの著作が当時のドイツ人に受け入れられた背景には、リベラルな民主主義的憲法をもつヴァイマル体制に対して右派も左派も抱いていた嫌悪があり、同書が有する宗教政治性があった。<sup>二</sup>フェルキツシュ思想がドイツ・ファシズムに至る過程を文化的に追ったジョージ・L・モッセは、一九六四年の著作『フェルキツシュ革命』で「第三帝国の知的起源」を既に考察して「ゲルマン的信仰の復活」を指摘しており、第十六章「ドイツ的革命」でメラーを「第三の道」の予言者とみなし、フェルキツシュなドイツ的社会主义がファシズムという「国際的運動」と結びつく過程を追いながら、メラーの思想が中世のメシア信仰の諸伝統を新しい時代に移す精神的な革命であるとみなしたのである。<sup>三</sup>モッセ以上に「第三の国」の知的起源を追ったクラウス・エツケハルト・ベルシュは、一九九八年ならびに二〇〇二年の時点でナチスのイデオロギーを宗教政治的な観点から問うた際、ヨハネの黙示録を「歴史神学の母」「近代の歴史目的論の祖母」と名づけ、歴史を三分割しながら黙示録を解釈した十二世紀イタリアの修道院長フィオーレのヨアキムにふれ、後世における影響の一つとしてエカルト、ゲッベルス、ローゼンベルク、ヒトラーの言説を分析した。<sup>四</sup>とはいえ、こうした分析があるにもかかわらず、政治思想家のヘルマン・ブツァーは二〇〇三年の時点で「トポスとして『第三の国』を扱う文学的・言語学的研究は極めて少ない」と言う。<sup>五</sup>その主張によれば、従来の研究がとかく「ライヒ」に偏りがちで、「第三の国」という言説そのものが注目されてこなかったからだ。そこでブツァーは、「第三の国」の知的起源をさらに掘り下げるために、二世紀のモンタヌス派と十二世紀のフィオーレのヨアキムをあげ、特に後者の影響が、フス、ミュンツァー、レッシング、シェリング、ヘーゲル、イブセンに及んだことを指摘する。ここでブツァーは十九世紀において「特別な契機をもたらす」*besonders anstößig* イブセンの劇『皇帝とガリラヤ人』（一八七三年）に触れ、ローマ皇帝ユリアヌスの名前を挙げながら異教とキリスト教のジレンマという意味で使われている「第三の国」について若干の補足を註で行う。但し、註による補足説明にとどまったこともあり、一八八八年のドイツ語訳『皇帝とガリラヤ人』がいかなる「特別な契機」をもたらしたのか、そして「第三の国」がそもそも背教者と称された皇帝とどのように結びつくのか、いずれも説明していない。いや、それ以上

に、中世イタリアで生じた「三」の思想が、ナチスの語彙使用とは全く異なる意味で用いられ、近代のドイツのみならず、ロシアや日本にも影響を与えたことは、ブツァアの論攷でもその後の研究でも総括的な研究はいまだなされていないのである。別言すると、「第三の国」をめぐる考察は、ナチス研究の枠内で行われることが多いので、モッセの説明とは異なり、必ずしも「国際的運動」と十分に結びつけられていないと言えよう。そこで本論は、「第三の国」研究におけるこうした欠落を補うため、一九二三年におけるヒトラーの移住先のパレルワールドとして一九一三年の東京に着目したい。というのも、一九二三年ベルリンにおける「第三の国」のいわば同音異義語とも称すべき思想が一九一三年の東京において展開されていたからである。その意味で、本論は、一九二三年から十年を下るのではなく、むしろ十年を遡る試論として、「第三の国」を東西交点という新たな視点で考察を行う。

## 二 「今や我国にも「第三帝国」の声は高い」

ここにあげた言説について、三つの問いを立てておこう。「今や」とはいつのことか、「我国」とはこの国か、「も」という助詞は何を意味するのか。この言葉が発せられたのは、ヒトラー政権掌握の一九三三年でもなければ、メラアの著作が出た一九二三年でもなく、むしろヒトラーがミュンヘンに移住した一九一三年の頃だが、「我国」とはドイツのことではなかった。件の言葉は、一九二四年三月、国文学者・国語教育学者の西尾実が雑誌『信濃教育』大正三年三月号所収の論攷「道元禪師」で発した言葉だったのである。その際、西尾はヘブライズムを「中世キリスト教思想の文明」、ヘレニズムを「近世ギリシャ思想の文明」の意で用い、西洋的な二項対立を日本で克服することを目指して「第三帝国」という言葉を用いていた。つまり、das dritte Reich という表記がドイツにおいて流布する前に、日本において、いや、日本において「も」流布していたのである。

西尾発言の背景として、およそ半年前にあたる一九一三年十月十日に茅原華山によって雑誌『第三帝国』<sup>七</sup>が創刊されたこ



図二 『第三帝国』創刊号表紙

とを指摘しておかなければならない。各号の上部に「THE THIRD EMPIRE」と記されたこの社会評論誌(図二)は、普通選挙請願運動を呼びかけ、民本主義の急先鋒となりながら帝国主義的な植民地主義を否定した雑誌である。一九一五年十二月に廃刊にいたるが、廃刊前の同年二月には同誌に掲載された主要論説が一冊の書物にまとめられて『第三帝国の思想』として刊行されており、同書に掲載された論文「新第三帝国論」によると、茅原は「一種の洪水」とされた戦争がヨーロッパで勃発する中で「世界は民族が対立角逐する時代とすれば、我々は自我主義を徹底して、世界を排除するのではない、世界を包括する民族主義に到達せねばならない」と考え、「新なる(ママ)世界的帝国」としての「第三帝国」を日本で模索したのである。<sup>一八</sup>

第一次世界大戦直前の日本で創刊された雑誌が第一次世界大戦後のドイツで刊行されたメララーの著作とまったく異なることは言を俟たない。両者の比較検討は、ドイツは言うまでもなく、日本においても見当たらないので、どの程度の違いがあるかを確認しておく必要がある。両者ともに歴史の三分割という点で共通するが、当然のことながら三段階がまったく異なる。茅原は、明治維新までの日本を第一帝国、国家至上主義的な明治の日本を第二帝国、そして文明的な霊肉一致の観点から霊に基づく「東洋の直覚生活」と肉に基づく「西洋の理智生活」の一致合流を「第三生活、第三文明、第三帝国」と解した。<sup>一九</sup>これに対してメララーの場合、「ライヒ」を巡る三段階として、第一の神聖ローマ帝国、第二のドイツ帝国に続いて、ドイツ史を継続する「第三の党」すなわち「第三の国」を求めたのである。<sup>二〇</sup>それは「新しい最終の国」<sup>二一</sup>であり、しかも「永久平和の思想」<sup>二三</sup>でもあったが、実際のところは、一九一九年成立のヴァイマル共和国を認めない保守勢力が求めた反動的な政治体制であった。メララーは「我々の国における西側を範にした議会政治の席卷」を打破すべき現実とみなしていたのである。<sup>二三</sup>先に用いたモッセの言葉を援用すると、日本の雑誌が目指した国際的運動は「世界の民主的大勢」<sup>二四</sup>であり、メララーの著作が連動したそれはイタリアのファシズムであった。より具体的に言えば、日本の社会評論誌が普通選挙請願運動や民本主義を支持したのに対して、ドイツ保守革命を代表する著作は議会政治のみならず、『第三の国』第三章に添えられたエビグラフ「リベラリズムに冒されて人々は破滅する」<sup>二五</sup>が示唆するように、政治的な自由主義を徹底的に批判するのであった。別言すると、「少数の貧乏武士が先づ覚醒し発奮して終に革新を行つた」後に刊行された日本の社会評論誌が西洋のリベラリズムに近づこうとしたのに対して、フェルキツシユなドイツの社会主義を標榜するメララーの著作は「リベラリズムは諸々の文化を葬つた。諸宗教を台無しにした。諸々の祖国を破壊した。それは人類の自己破壊だったのである」<sup>二六</sup>と述べて、フランスやイギリスなどの「西側」Westenに由来するリベラリズムを断固拒否したのである。こうした拒絶があるからこそ、フリッツ・シュテルンは一九六一年の著作『文化的絶望の政治』<sup>二七</sup>において、非政治的な不満を政治化させ、ナチスの思想的先駆となった三者として、パウエル・ド・ラガルドやユーリウス・ラングベーン<sup>二八</sup>と共にメララーを集中的に扱ったのであった。メララーは、非政治的な不満を政治化させた際、批判の矛先をマルクス主義にも向け、「どの民族も独自の社会主義

をもつ。／マルクスはドイツの社会主義を根本的に破壊した。ドイツの社会主義にいかなる成長もたらさなかった。〔中略〕彼は国民的な社会主義の芽 (die Keime eines nationalen Sozialismus) を埋めてしまったのだ<sup>二九</sup>。〕と言う。こうした糾弾からは「国民社会主義」Nationalsozialismus の思想的先駆が読み取れよう。一九一八年のドイツ革命を単なる「反乱」としかみないメラールは、「保守的な」革命となるナショナルな社会主義を求め、プロレタリア運動を装うインターナショナルな社会主義を徹底的に拒んだ。〔マルクス主義が終わるところで社会主義が始まる〕と言いつけるメラールによれば、始まるのは「第三の国」の基盤となる「ドイツの社会主義」であった<sup>三〇</sup>。メラールは別の言い方もしており、それによると、ドイツの社会主義の中核を担う「反動的な人間」は非政治的な人間として「第三の国」を思い出すのである<sup>三一</sup>。

メラールの著作に見られるマルクス主義批判は、ロシア革命以前に刊行された日本の社会評論誌から読み取ることができない。両者の根本的な相違は、日本の雑誌が、創刊号冒頭に掲載された「志を述べ」で主張されているように、植民地主義的な大日本主義を否定し、満韓放棄論とも称された小日本主義を支持したのに対して、ドイツ保守革命の著作が大ドイツ主義を標榜した点に行き着く。後者では「第二の国は不完全なライヒであった。この第二の国とともに第一の国の時から生き残り続けているオーストリアを取り込んでいなかったのだ。それは、大ドイツ国に行きつくために、またしても回り道としか理解できない小ドイツ国であった」と書かれていた。大ドイツ主義をめざす「第三の国」は、メラール自身が序文で述べているように、「千年王国への期待<sup>三二</sup>」と結びつく。こうした宗教政治的な思潮こそ、ドイツにおけるフェルキッシュ思想の核だと言つてもよい。ナチス・ドイツの精神史的な前史を問う研究の嚆矢となった J・F・ノイロール著『第三帝国の神話——ナチズムの精神史』(一九五七年)によれば、ヒトラーに権力をもたらした「国民運動」としての「千年王国」は「十九世紀、特に二十世紀におけるドイツ民族の発展に陰に陽に伴った数々の思潮、運動、幻想、神話の帰結であり、ドイツ人のあらゆる願望の夢、悪習、退化のジンテーゼ」であった<sup>三六</sup>。日本の社会評論誌からあまり読み取ることができない宗教政治的な思潮も、メラールの著作における特徴と言えよう。

以上のとおり、日本のリベラルな雑誌とドイツのフェルキッシュな著作は決定的な相違が数多くあるが、両者が共有する

三つの共通項にも目を向けておきたい。(一)どちらにおいてもフィオーレのヨアキムの名前が挙げられていないが、歴史の三分割そのものが第一の共通項とみなせる。そうした三分割は、弁証法的な展開を示しながらも、弁証法的な歴史観とは異なり、「第三の国」を第三かつ最終の局面とみなすことで「第四の国」を想定していない。日本の雑誌では「第三帝国」以降の展開に関する言及が皆無であるし、メララーの著作は序文において「第三の国」を「我々の最高で最後の世界観」と明言している。(二)第二の共通項として、ドミトリー・メレシコフスキーに触れておかなければならない。このロシア作家は評論『トルストイとドストエフスキー』(一九〇一—一九〇二年)の中で霊肉一致を実現する「聖霊の王国」の到来を希求し、「言葉の英雄」である作家の中から「第三かつ最終の精神の王国で人類を治める選ばれし人」が現われると主張していた<sup>三六</sup>。しかも雑誌『第三帝国』の場合、創刊号ではイブセンが、第二号ではメレシコフスキーが話題の中心をなす。実際に、創刊号においては新劇運動に関わった島村抱月の寄稿「イブセン劇の『第三帝国』」が、「霊か肉か」という問いを巻頭から立てる第二号においてはロシア文学者である梶野夢の寄稿「メレジユコフスキーの作物に現はれたる霊肉一致の思想」が、それぞれ耳目を引く。このように日本の雑誌において両者が重視されるのは、ノルウェーの劇作家が歴史劇『皇帝とガリラヤ人』(一八七三年)を、ロシアの象徴主義者が小説「神々の死——背教者ユリアヌス」(一八九六年)を、つまり両者ともに背教者ユリアヌスを扱う作品を世に問うていたからだ。三六一年から三六三年までの在位期間に太陽神崇拜ゆえに「背教」の道へ踏み出したこのローマ皇帝が、雑誌の表紙において太陽を指さす若者、つまり「第三の国」を体現する人物として描かれていたことは決して偶然ではない。また、ドイツ語圏の文芸評論家レーオ・ベルクが一八九七年に上梓した『現代文学における超人』で「第三の国のメシア」としてイブセンを、「人類の新しい第三の国」の先行者としてメレシコフスキーを既に論じていたことを踏まえると、日本における両者の受容が例の西尾発言を生み出し、発言中の「我国にも」という言い回しが示唆するように、日本の雑誌が国際的動向を踏まえていたと言えよう。さらに言えば、メレシコフスキーの場合、メララーに「特別な契機をもたらす」ことになったことを忘れてはならない。メレシコフスキーはモダニズムに傾倒した象徴主義者でありながら、同時にモスクワを「第三のローマ」とみなすロシア独自の黙示録解釈を復活させた人物でもあ

ったが、メラーは一九〇二年から一九〇六年の間にパリに滞在した際にメレシコフスキーと知り合い、一九〇六年から一九一九年までの間にメレシコフスキーの協力を得てドイツで最初のドストエフスキー全集を編纂したのである。(三) 以上の連関で、第三の共通項としてニーチェの名前も挙げておきたい。というのも、上述のレーオ・ベルクによって一八八九年にニーチェに関する最初の資料が残されたことから始まるニーチェ受容が、新しい人間像を求める運動として、日本のリベラルな雑誌にもドイツのフェルキツシュな著作にも影響を及ぼしていたからだ。雑誌『第三帝国』の場合、昇曙夢のぼりしよむの「メレジエコフスキーの作物に現はれたる霊肉一致の思想」、森田章平訳によるメレシコフスキーの「霊肉問題と死の恐怖」、中川臨川の「ニーチェの片影」などでニーチェが繰り返し扱われているだけでなく、高安月郊の「近代文学に於ける『第三帝国』では「イプセンよりもニイツチェの影響が著しい」人物としてメレシコフスキーが論じられていた。このように日本の社会評論誌では文学に重きが置かれた社会思想の中でニーチェが論じられていたのに対して、メラーの著作ではフェルキツシュな思想としてニーチェが扱われている。メラーは、一八九九年に『チャンダーラ ニーチェ』を公刊し、先にあげたドストエフスキー全集を通じて独自のニーチェ理解を示し、生への衝動を持つゆえに世界において優位に立つドイツ人を主張していた。<sup>四〇</sup> その上で『第三の国』では「世紀末の精神史において別の極に立ち、マルクスに対立する」人物としてニーチェを位置づけていたのである。<sup>四一</sup>

### 三 東と西における「パウリ、フリードリツヒ」

ニーチェから強い影響を受けたトーマス・マンは一九二四年の小説『魔の山』で「病氣と死の密封空間」を描いた。このような時空は私たちが佇む二〇二三年の世界にも当てはまるのではないか。このような危機意識からドイツを振り返ったとき、一九二三年に刊行されたメラーの『第三の国』と一九三三年に政権を獲得した「第三帝国」に行き着き、さらには一九一三年に日本で刊行された雑誌『第三帝国』にも行き着きついた。その上でメラーの著作と日本の雑誌を比較しながら歴史

三分割の思考を遡ったときに、十二世紀イタリアの修道院長フィオーレのヨアキムを視野に入れることにもなったのである。ヨアキムの思想が中世や近世にもたらした宗教的な影響は、ミルチャ・エリアーデによって「ヨアキム主義」と名づけられていたが、これに対して近代以降の社会思想史的影響は「ネオ・ヨアキム主義」と命名できよう。両者は歴史を三分割し、「第三の国」を第三かつ最終の局面とみなす点で共通するが、もつとも前者が宗教的で後者が社会思想的であると言いつれない点にも注意を要する。ヨアキムの聖霊論が中世や近世において千年王国への熱狂的な待望と化し、類似の待望が近代以降において擬似宗教的に政治化して残り続けたからだ。その点を踏まえてノイローレは『第三帝国の神話』の「第三帝国と千年王国」という章において「我々はヨーロッパの長い精神史の流れの中で第三の国の夢に繰り返し出会う」と言った<sup>四三</sup>。但し、この言葉にも注意しなければならない。というのもヨアキム主義に関連するさまざまな出来事は確かにヨーロッパで、特にドイツでトーマス・ミュンツァーやミュンスタール再洗礼派による急進的な宗教改革運動として起きたが、ネオ・ヨアキム主義に関しては必ずしもヨーロッパ、少なくとも西欧に限定できないからだ。一四五三年のコンスタンティノーブル陥落後、ヨアキムの影響がロシアにおいても独自の展開を遂げ、古代ローマと第二のローマであるコンスタンティノーブルがそれぞれ亡びた後、真のキリスト教信仰は「第三のローマ」であるモスクワにおいて保持されるという思想が民衆に根強く広まったのである<sup>四四</sup>。ネオ・ヨアキム主義は、「西」と「東」でそれぞれ独自の展開を遂げ、十九世紀後半に至ると、イブセンそしてメレシコフスキーにおいてそれぞれ特異な「第三の国」を培ったのだ。ロシア人に関しては、ドイツで活躍した画家カンディンスキーが第一次世界大戦前に抽象絵画の到来を「第三の黙示」とみなしていた点も見逃せない<sup>四五</sup>。同大戦前にメレシコフスキーがバリエに、カンディンスキーがミュンヘンに移住したことを考えると、かつて東西に分離した「第三の国」という理念が再び出会い、新たな展開を遂げることになった。その結果、二十世紀においてネオ・ヨアキム主義はモッセのいう「国際的運動」よりも遙かに広く展開したのである。

事実、「第三の国」をめぐる思潮は雑誌『第三帝国』を通じて日本においても「第三帝国」招来の声として高まったのであった。この社会評論誌がネオ・ヨアキム主義において最も重要な東西交点であると言つてもよいであろう。同誌において

繰り返しイブセンとメレシコフスキーが扱われているだけではない。創刊号冒頭の「志を述ぶ」にある「『第三帝国』の名は、ヘンリック、イブセン及びパウリ、フリードリツヒの劇に取れり」という説明が何よりの証左だ。もつともこの説明はかなり不十分な説明である。そう言わざるを得ないのは、「パウリ、フリードリツヒ」に関する記載は、「志を述ぶ」の他に、茅原の「新第三帝国論」における「第三帝国といへる思想は、イブセンやポール、フリードリツヒやメレヂユコフスキー等から来た」という説明と日本におけるイブセン受容において先駆的な役割を果たした高安月郊の記事「近代文学に於ける『第三帝国』」にしか見当たらないからだ。高安はイブセンの『帝とガリ、アン』とメレシコフスキーの『神の死』を簡単に紹介し、併せてメレシコフスキーに多大な影響を与えたニーチェの「超人」を「未来の理想」と言及し、「近代人の精神的悲劇」を描いた人物が「パウリ、フリードリヒで、其劇を『第三帝国』と名づけた」と述べた上で当該の劇から引用を行っている。

既に私にはその世界が暗闇の中から立ち上がるのが見える、新たな大地、ああ、第三の国が！ ここでは真が美と合一して、人間の力に向けたヒュメナイオスの呼び声となる。太陽は永遠なる真昼の輝きを放ち、自由に目覚めた者たちの頭上を愛という金の王冠でことごとく飾るのだ！ 花嫁のような姿をし、思い焦がれながら、山と野は佇み……神聖なものに向かつて延びている。万物の中では、ひとつにまとまって大きくなった新しい素晴らしい世界の祝福がまるで果実のように芽吹く。すべてが深く、神秘であり、満ち溢れた泉……そのヴェールは真珠色の露をあびてきらめく……野は輝き……谷と草地は笑い、すべての上には冥界のような静けさが漂う……過去は夢となり……深い沼の中へ、ぱつくりと開いた墓の中へ沈んだ。ただ未来と永遠の現在が……永遠の生成が実現をなおも待ち望んでいる……だが、その視線の先には時間という海が果てしなく広がっている。これらがお前を直視しているのだ、永劫よ！

高安が劇『第三帝国』から比較的長めの引用を行ったのは、「近頃の文学で最も注意すべきもの」と見なしたからであ

る。しかしながら、こうした評価にもかかわらず、雑誌『第三帝国』は、「パウリ、フリードリッヒ」であれ、「ポール、フリードリッヒ」であれ、「パウル、フリードリヒ」であれ、件の劇作家がいかなる人物であり、その劇がいかなる作品であるかを説明していない。この引用箇所が存在する劇は、ライプツィヒのクセーニエン社から一九一〇年に出版されたパウ  
ル・フリードリヒ『第三の国 個人主義の悲劇』に他ならないが、この作品も、「パウル・フリードリヒ」という人物も、  
日本は云うに及ばず、ドイツ本国においても今ではほとんど知られていないのが現状である。<sup>五</sup>

パウル・フリードリヒの『第三の国』は、ニーチェをめぐる史実のみならず、『第三の国』序文を援用すると「フリードリヒ・ニーチェ神話」<sup>五</sup>からも成り立つ。スイスのルツェルン湖畔の町トリープシェンに一八六六年から六年間住んでいたヴァーグナーは、一八六九年五月十七日に若いニーチェの訪問を受けた。フリードリヒの劇は、この史実に基づく両者の対話をいわば再現しながら、劇中でマイスターと称されたヴァーグナーに対する哲学者ニーチェの礼讃を示し、劇中で示される原稿『パイロイトにおけるヴァーグナー、反時代的考察 第四篇』に基づいてニーチェの微妙な意識の変化が暗示され、一八七六年に行われた第一回パイロイト音楽祭での騒動とヴァーグナーに対するニーチェの幻滅を経て、真と美が合一する「新たな大地」の到来をツアラトウストラの誘いによってニーチェが見る幻視を示す。つまり、劇の序文で「極めて強烈な文化悲劇」と称された「ニーチェの悲劇」<sup>五</sup>が、ニーチェ『ツアラトウストラはこう言った』に依拠しながら「第三の国」という理念に行き着くのである。

ツアラトウストラ 微笑みながら…今日、汝の機は熟した。いまや私は到来した。第三の国が自らの神を呼んでいる、  
汝の国に来たれ！（数歩前に進む。誘いながら）来たれ！<sup>五</sup>

序文で言及された「ニーチェ神話」と結末で予見される「第三の国」とを結びつけるためには、序文で名前が挙げられている「私の忘れたい友人であり助言者でもあるレ・オ・ベルク」についても触れておかなければならない。この人物が一

八八九年にニーチェ受容に関する最初の資料を残したことは既に述べた。ここではベルクが前述の『現代文学における超人』において、「神秘主義者たちがかつて告知し、今日では預言的な詩人たちが夢を見ているものこそ第三の国<sup>三</sup>」であると述べながらニーチェの超人思想を論じ、既に指摘したとおり、「第三の国のメシア」としてイブセンを、「人類の新しい第三の国」の先行者としてメレシコフスキーを論じていたことを忘れてはならない。つまり、十九世紀末の「第三の国」をめぐる言説を的確に捉えていた「私の忘れがたい友人であり助言者」の影響を受けて、新理想主義に立脚するフリードリヒは「ニーチェの悲劇」をめぐる文化批判と「第三の国」をめぐる新たな理想を結びつけたのである。

ネオ・ヨアキム主義における東西交点をパウル・フリードリヒ『第三の国』刊行三年後に日本で更に展開させたのが、雑誌『第三帝国』であった。「第三の国」をめぐる言説は、一方でドイツにおいて危機の年一九二三年に一挙に政治化して一九三三年に至ったが、他方で一九二三年以前、特に一九一三年以前に既に、ドイツ、ロシア、日本などで多様に展開していたのである。つまり、一九二三年以後の画一的な政治的動向のみならず、一九二三年以前の多様な文化的な思潮も更に検討していかなければならない。それだけに、西尾発言にある小さな言葉「も」が今なお大きく響くのではないか。

## 註

- 一 この連続講義最終回は本論執筆者が「„Das dritte Reich“ vor der NS-Zeit in Ost und West. Von Berlin 1923 über Tokio 1913 bis nach Berlin 1900」という題目で二〇二三年七月十九日に担当した。講義原稿の一部を本論執筆の際に用いたことを予め断っておく。また、日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第一五四号の特集「黙示録とユートピア」を香田芳樹教授と一緒に企画した際、論者自身が投稿した論文（小黒康正「第一次世界大戦期の日本とドイツにおける「第三の国」——イブセン、メレシコフスキー、トーマス・マン——」、日本独文学会編『ドイツ文学』第一五四号、二〇一六年、一〇三—一二二頁）とも内容的に一部重複があ

- る。なお、執筆の際には科学研究費補助金「近現代ドイツの文学・思想における「第三の国」―成立・展開・変容―」（基盤研究 B、課題番号二一 H〇〇五一六）の助成を受けた。
- スタン・ラウリセンス『ヒトラーに盗まれた第三帝国』、大山昌子・梶山あゆみ訳、原書房、二〇〇〇年、二〇八頁参照。
- 三 連続講義の論集刊行は二〇二三年十二月の予定。
- 四 土田宏成『災害の日本近代史』、中公新書、二〇二三年、一八七頁以下参照。
- 五 事実、国民社会主義ドイツ労働者党が一九三〇年九月の国政選挙で大きく議席を伸ばし第二党となった勝因の一つとして、左翼・リベラルのデモクラシー体制でも反動的君主制でもない「第三の国家」を強力にアピールしたことが挙げられる。芝健介『ヒトラー―虚像の独裁者』、岩波新書、二〇二一年、一一五頁参照。
- 六 Vgl. Hermann Butzer: Das „Dritte Reich“ im Dritten Reich. Der Topos „Drittes Reich“ in der nationalsozialistischen Ideologie und Staatslehre. In: Der Staat. Vol. 42, Nr. 4 (2003), S. 620.
- 七 『ヒトラーのテンプル・トーク 1941-1944 (上)』、吉田八峯監訳、三交社、一九九四年、二二三頁。
- 八 メラー・ファン・デン・ブルックはドイツ語圏の Arthur Moeller van den Bruck と表記されることが多いが、一九〇四年以降、本人は Moeller van den Bruck と名乗り、一九二三年の著作でもこの表記を用いている。父親は Ottomar Moeller、母親は Elisabeth van den Bruck とごう名前であった。以下、メラールと略述する。Vgl. André Schlieter: Moeller van den Bruck. Leben und Werk. Köln und Weimar 2010, S. V f. なお、本論では「ナチスの「第三帝国」Das Dritte Reich」と区別するために「ナチス以前の第三の「ライヒ」を「第三の国」Das dritte Reich」と称す。ナチスの「第三帝国」という言説は、近年の研究によれば、一九一九年に「ドイツ労働者党」を設立し同年にヒトラーと知り合ったディートリヒ・エカルトによるが、しかし、「第三の国」という言説が流布する重要な契機はやはりメラールの著作であった。Vgl. Claus-Ekkehard Bartsch: Die politische Religion des Nationalsozialismus. Die religiösen Dimensionen der NS-Ideologie in den Schriften von Dietrich Eckart. 2., vollst. überarb. Aufl. München 2002, S. 53 ff.
- 九 エルンスト・ブロッホ『この時代の遺産』、池田浩士訳、ちくま学芸文庫、一九九四年、九十六頁ならびに六一三頁参照。
- 一〇 ヘルリーンのリング社から初版二万部で出されたメラールの著作は、一九三〇年代半ばまでに十三万部売れた。Vgl. Butzer, a. a. O., S. 602.
- 一一 メラーはドイツ人の心に礼拝と宗教の響きをもたらすケルト語由来の「ライヒ」Reich という言葉を巧みに用いていた。Jean F. Neurohr: Der Mythos vom Dritten Reich. Zur Geistesgeschichte des Nationalsozialismus. Stuttgart 1957, S. 217 f.

- 二一 ジョージ・L・モッセ『フェルキッシュ革命 ドイツ民族主義から反ユダヤ主義』、植村和秀訳、柏書房、一九九八年、三五頁以下参照。英語初版の原題も示しておく。George Lachmann Mosse: *The Crisis of German Ideology. Intellectual Origins of the Third Reich*. New York 1964.
- 二二 Barsch, a. a. O.
- 二三 Butzer, a. a. O., S. 600.
- 二四 Vgl. ebd., S. 605 f.
- 二五 杉哲「西尾美と道元 (IX)」、熊本大学教育学部『人文科学』第六十号、二〇一二年、六十九―八十頁、特に七十三頁参照。
- 二六 茅原華山他編『第三帝国』、全十冊、復刻版、不二出版、一九八三―一九八四年。なお、本論では引用の際に旧字体を新字体に書き直している。
- 二七 茅原華山「序」、益新会同人編『第三帝国の思想』、一九一五年、五―六頁参照。茅原華山他編『第三帝国』には頁番号が付されていないので、本論では引用の際に可能な限り益新会同人編『第三帝国の思想』を用いる。
- 二八 茅原「第三帝国の思想」、前掲書、九十三頁。
- 二九 Moeller van den Bruck: *Das dritte Reich*. Berlin 1923, S. 244.
- 三〇 Ebd., S. 258.
- 三一 Ebd., S. 257.
- 三二 Ebd., S. iii.
- 三三 茅原「第三帝国の思想」、前掲書、一二三頁。
- 三四 Moeller van den Bruck, a. a. O., S. 59.
- 三五 Ebd., S. 80.
- 三六 Fritz Stern: *Kulturpessimismus als politische Gefahr. Eine Analyse nationaler Ideologie in Deutschland*. Aus dem Amerikanischen von Alfred P. Zeller. Stuttgart 2005. 英語版原著と邦訳も示しておく。Fritz Stern: *The Politics of Cultural Despair: a Study in the Rise of the Germanic Ideology*. University of California Press 1961. フリッツ・スターン『文化的絶望の政治』、中道寿一訳、三嶺書房、一九八八年。
- 三七 ラングベーンはドイツ民族に深く根ざしたルターの「第一の宗教改革」と精神から出発したレッシングの「第二の宗教改革」と

のジンテーゼとして、レンブラントが「第三の宗教改革」を実現すると主張した。この事例は、十七世紀のオランダ画家が十九世紀のドイツにおいてナショナル・アイデンティティの連関で好んで受容されたことを示す。Vgl. Fritz Stern, a. a. O., S. 169.

二九 Moeller van den Bruck, a. a. O., S. 64.

三〇 Ebd., S. 131.

三一 Ebd., S. 61.

三二 Ebd., S. 63.

三三 Vgl. ebd., S. 194 f. 二人の「非政治的人間」を思い出す。というのも、一九二二年の『フィオレンツァ』に寄せて』の末文で「詩人は、常に至るところでジンテーゼを、精神と芸術、認識と創造性、知性と単純、理性と魔術性、禁欲と美の和解を実現するのだ、つまり第三の国を」と述べたトーマス・マンは、第一次世界大戦の勃発とともに自らの非政治性を政治化させ、一九一五年のアンケート回答「ストックホルムの『スウェーデン日々新聞』編集部宛」が示すように、「権力と精神のジンテーゼ」である「第三の国」をドイツにもたらしものとして戦争を理解した。しかも、マンは、一九一八年十月十五日の日記において、メラーが編纂したドイツで最初のドストエフスキー全集の序文に関心を示し、第一次世界大戦後、メラーが中心的な役割をはたした「六月クラブ」に出入りをしていたのである。拙論「第一次世界大戦期の日本とドイツにおける「第三の国」——イブセン、メレシコフスキー、トーマス・マン——」参照。

三四 Moeller van den Bruck, a. a. O., S. 257. なお、メラーは一九一八年の論文「若い諸民族の権利」で、「若い民族のための結節点となる使命」を与えられたドイツによって東方のヨーロッパ化が果たされると主張していた。Neurohr, a. a. O., S. 210 f.

三五 Ebd., S. ii.

三六 Neurohr, a. a. O., S. 7 f.

三七 Vgl. Moeller van den Bruck, a. a. O., iii.

三八 Dmitri Mereschowski: Tolstoi und Dostojewski als Menschen und als Künstler. Eine kritische Würdigung ihres Lebens und Schaffens. Übers. von Carl von Gütschow. Leipzig 1903, S. 115.

三九 Leo Berg: Der Übermensch in der modernen Literatur. Ein Kapitel zur Geistesgeschichte der modernen Literatur. Paris, Leipzig und München 1897, S. 74 u. 111.

四〇 Schlüter, a. a. O., S. 1 ff.

- 四一 Moeller van den Bruck, a. a. O., S. 141.
- 四二 ミルチア・エリアーデ『世界宗教史 Ⅲ』、鶴岡賀雄訳、筑摩書房、一九九一年、一三二頁以下参照。
- 四三 ノーマン・コーン『千年王国の追求』（江河徹訳、紀伊國屋書店、二〇〇八年、英語版原著一九五七年）ならびにバーナード・マッキン『フィオーレのヨアキム 西欧思想と黙示録的終末論』（宮本陽子訳、平凡社、一九九七年、英語版原著一九八五年）参照。
- 四四 Neurohr, a. a. O., S. 22
- 四五 粟生沢猛夫「モスクワ第三ローマ理念考」、金子幸彦編『ロシアの思想と文学』、恒文社、一九九七年、九頁以下。
- 四六 Sixten Ringbom: Kandinsky und das Okulte. In: Kandinsky und München. Begegnungen und Wandlungen 1896-1914. Hrsg. von Armin Zweite. München 1982, S. 85-105, hier S. 101.
- 四七 茅原他編『第三帝国』、第一巻冒頭。
- 四八 茅原「新第三帝国論」、『第三帝国の思想』、三十四頁以下。
- 四九 高安月郊「近代文学に於ける『第三帝国』」、前掲書、一三三頁以下。なお、この引用は作品全体としては本邦初訳となる拙訳を用いた。パウル・フリードリヒ『第三の国 個人主義の悲劇』、小黒康正・橋本佳奈訳、九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第三十五号、二〇二一年、六十二頁。
- 五〇 高安「近代文学に於ける『第三帝国』」、前掲書、四五頁。
- 五一 パウル・フリードリヒに関しては、一九六八年から刊行が開始された『ドイツ文学事典』を除くと、一九六五年刊行の『ギント ヌーヴェル』や一九九二年刊行のヴァルター・キリー編『文学事典』、更には一九九五年刊行の『ドイツ伝記全書』（DBE）など、項目が欠く。Vgl. Deutsches Literatur-Lexikon. Biographisch-bibliographisches Handbuch. Begründet von Wilhelm Kosch. Band 5, Bern 1977, S. 718 f.
- 五二 Paul Friedrich: Das dritte Reich. Die Tragödie des Individualismus. Leipzig 1910, S. IX.
- 五三 Ebd., S. X.
- 五四 Ebd., S. 99.
- 五五 Berg, a. a. O., S. 74.